

第1部 研究の目的と経過

第1章 研究の背景と目的

研究の背景 九州島の西岸には、北から有明海、八代海という2つの内海が存在する。いずれも南北に長い内海で、東西幅は有明海でおよそ15～20km、八代海では10kmを少し超えるほどしかなく、現地に立ってそれら海を眺めてみると、とても狭いという印象を受ける。太平洋や日本海といった外洋に直接面したところとは、まったく異なった景色に映る。

そうした狭さゆえ、古来、それぞれの内海は、九州島西岸を南北につなぐ重要な交通路となってきた。また、有明海の東岸には北から筑紫平野、玉名平野、熊本平野が、八代海の北東岸には八代平野が広がり、九州島北部からのさまざまな文化要素は、内海を、またこうした平野を伝うように伝播した。

さらに、そうした狭さは、海を囲む地域が共通した文化要素を発達させる要因ともなった。古墳時代では、とくに八代海沿岸地域のなかでもその北半部において共通の在地墓制が発達した。石障系横穴式石室や千崎型箱式石棺〔島津屋2009〕などはその典型である。円文を有する装飾古墳もその1つに数えられよう。

こうした点に注目し、私（杉井）は先に「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究」と題した共同研究を企画し、天草諸島北部に立地する上天草市カミノハナ古墳群や九州島側の宇城市松橋前田遺跡A地点から出土した埴輪や須恵器、鉄製武器武具等の分析を基礎におきつつ、当該地域に発達した在地墓制について考察した〔杉井編2009〕。また、これと並行し、上天草市史大矢野町編纂事業〔甲元・杉井編2007〕とも関連させながら、同市所在の千崎古墳群などを継続的に調査し、天草諸島に産する砂岩を用いた箱式石棺や横穴式石室の構造等を明らかにした〔千崎古墳群：森編2005、前田編2006、三好・仙波編2007、山野・有馬編2008、一本・高濱編2009、長砂連古墳：南編2005、広浦古墳：神川編2006、桐ノ木尾ばね古墳：三好編2007、南編2009、出土人骨：杉井編2006〕。

このような在地墓制に着目した調査・研究を行うなかでつよく意識するようになったのは、地域的に発達した埋葬施設であっても、それは近畿地方中央部を核とする古墳文化総体のなかでとらえられるべきものであるという、しごく当たり前のことである。たとえば、千崎古墳群10号墳は天草砂岩でつくられた千崎型箱式石棺を主体部とするが、その小口部棺外テラス面からはミニチュアの鉄鎌、鉄斧、鉋、刀子が出土した〔三好・仙波編2007〕。こうしたセット関係をなすミニチュア農工器具類を副葬する行為は近畿地方のそれと共通し、またその種の副葬品を小口部に納めていることも合わせて考えると、きわめて在地色の濃い墓制であっても、葬送儀礼にかんする情報は中央政権と共有していた可能性が高いと判断される。とすれば、やはり、在地墓制のみではなく地域に築造された首長墓も調査・検討し、両者の相互関係を分析する作業を通じて、地域の古墳時代社会を日本列島全体のなかで相対化して位置付けることの重要性は明らかである。

さらに、これは熊本県特有のことであるのかもしれないが、未報告のまま放置され、最悪の場合その存在さえほとんど知られていない古墳出土資料がきわめて多い点も問題であった。先の共同研究で整理・報告した松橋前田遺跡A地点出土埴輪もこうした未報告資料の1つであった。古墳の時期やその階層的位置をとらえ、そして地域の首長墓系譜について考察しようとするとき、重要資料でさえ知る人ぞ知るといった状態では、共通の土俵での議論は望むべくもない。こうした資料公開の不備は、熊本県地域の古墳時代研究にとって大きな障害であることは明らかである。文化財の保護・活用の点でも好ましいことではけっしてない。そのため、このような状況を少しでも改善する方向へ進めることができればと考えていた。

以上のような問題意識のもと、私は、首長墓にかんしては熊本市植木町高熊古墳〔西嶋編2004〕や氷川町大野窟古墳〔杉井2012a〕の調査にかかわってきた。また、未報告資料の整理・報告では、国指定重要文化財「肥後マロ塚古墳出土品」の調査を企画し〔杉井・上野編2012、杉井・檀編2003〕、またわずかではあったが菊水

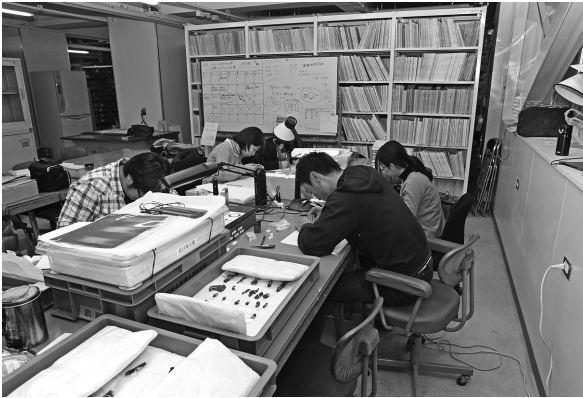


図1 長目塚古墳出土遺物の実測作業 (2010年12月)



図2 カミノハナ古墳群の測量調査 (2011年8月)



図3 平原6・7号墳の測量調査 (2011年11月)



図4 平原6号墳の発掘調査 (2013年9月)

町による江田船山古墳出土遺物の総合調査にも参加した [杉井 2007]。

しかし、こうした活動を行いつつも、それぞれの調査が単発的なものにとどまっている点に若干の問題も感じていた。そこで、在地墓制と首長墓の関係をより具体的に探る調査・研究の実施が必要であるとの認識のもと、前回の共同研究からの継続性も考慮し、本研究課題「有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究」を構想するに至ったのである。

研究の目的 そこで、本研究では、有明海や八代海に面した地域およびその周辺に築造された前方後円墳をはじめとする首長墓と、箱式石棺や石障系横穴式石室、装飾古墳といった在地墓制とがどのように関係しながら展開するのかを、首長墓の測量・発掘調査等によって得られたデータ、および未報告のままとなっている古墳出土資料を整理・分析する作業を通じて明らかにすることを目的とした。とくに、熊本県地域において在地墓制の特徴が顕著にあらわれる古墳時代中期に着目し、当該時期の中央政権がどのように地方支配を実体化させていったのかについて考察することを目指した。また、地元の若手考古学研究者とともにこうした調査・研究を行いながら、今後も継続的に未報告資料を整理・公開するための方策を探ることも目的の1つとした。

(杉井 健)

第2章 研究の経過

上述の研究目的を達成するためには、首長墓と在地墓制の双方を視野におきつつ調査できるフィールドを選択することが肝要である。また、地域の古墳文化を考えるうえできわめて重要なものでありながらも、十分な報告がなされていない古墳出土資料で、かつ今それを扱うことが許可されるものを選び出すことも大切である。その際、本研究期間内に整理・報告作業の完遂が可能な質と量であればさらに望ましい。

こうした観点のもと、主要なフィールドとして選んだのが阿蘇地域である。阿蘇は九州島のほぼ中央に位置し、その東西南北をつなぐみちすじの結節点にある。東からは大野川、西からは白川や菊池川、合志川、北か

らは筑後川、南からは五ヶ瀬川や緑川、こういった河川をさかのぼれば阿蘇に至るのである。そうした阿蘇のカルデラ内北部、阿蘇谷の北外輪山の麓に、古墳時代中期になって阿蘇市中通古墳群が造営された。そこには、墳長111.5mの前方後円墳、長目塚古墳があり、その規模は熊本県地域でも五指に入る。

このように阿蘇地域は、熊本県地域はもちろんのこと、交通の要衝という点で九州島全体においてもきわめて重要な地域である。しかし、そこに立地する古墳の様相はほとんど明らかにされていない。阿蘇地域の中心的な首長墓と目される長目塚古墳にかんしても、1949・1950年に発掘調査され1962年には報告書が刊行されているが〔坂本1962〕、これまでも幾度か指摘したようにその築造時期についての評価は一定していない〔杉井2010・2012b〕。これは、先の報告書のみではやや情報に不足があり、前方部石室出土の副葬品や墳丘出土の埴輪、須恵器等について十分に検討することができないことに原因の一端が存在する。そこで、長目塚古墳出土遺物の再整理作業を調査・研究活動の1つの柱にすえたいと考えたのである。

長目塚古墳出土遺物は阿蘇神社の所蔵品となり、大切に守られてきた資料である。しかし、資料を徹底的に調査・分析するためには、対象となる資料がつねに観察できる状態にあることが望ましい。そこで、阿蘇世界文化遺産推進室および阿蘇市教育委員会のご助力を得て、阿蘇神社から熊本大学への資料の長期借用（2010年10月～2012年5月）の許可を得た。また、熊本県教育委員会に保管されていた埴輪についても借用・調査の許可を受け、すべての長目塚古墳出土遺物を一同に集めて整理することが可能になった（図1）。そのおかげで、とくに埴輪については、接合関係などの検討が進んだ。調査・分析の終了後は、阿蘇神社および熊本県教育委員会との協議のもと、すべての資料を阿蘇神社に返却した。

長目塚古墳出土遺物の調査・分析に並行して、阿蘇地域に所在する古墳の情報収集も行ったが、首長墓にかんする新たな資料を得ることを目指して、阿蘇市平原古墳群の現地調査にも着手した。平原古墳群は、長目塚古墳が位置する中通古墳群の北西に近接し、お互いを視認できる距離にある。現状で2つの尾根筋に9基の円墳が分布することが確認されている。その6・7号墳の測量調



図5 平原6号墳の墳丘



図6 平原6号墳の墓石



図7 平原6号墳出土の壺形埴輪（単口縁）

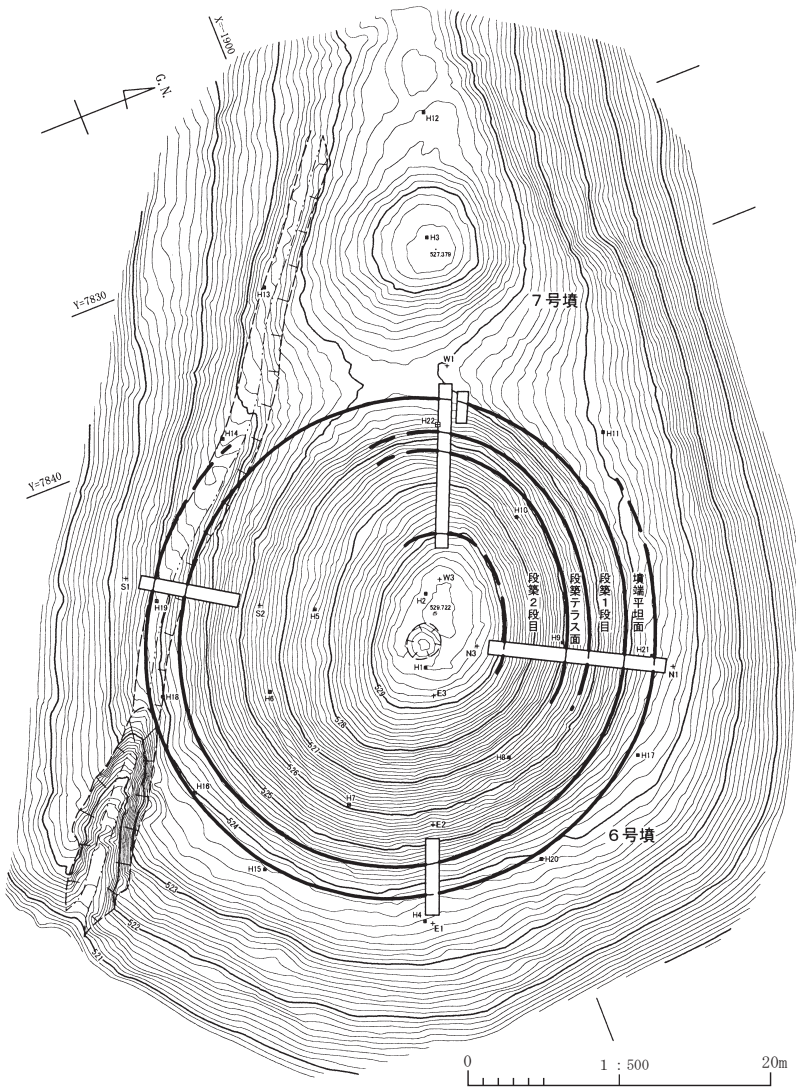


図8 平原6号墳丘形態復元図 (2013年度調査までの成果による)

2011年度に上天草市カミノハナ古墳群の測量調査も実施している(図2)。上述したように、カミノハナ古墳群の出土遺物については先の共同研究において再整理作業を行ったが[杉井編2009]、横穴式石室の実測図にも修正されるべき箇所が存在することから、時機をみて再発掘調査を実施できればと思っている。

本研究では、以上のようなフィールド調査や遺物整理作業を行いながら、メンバーそれぞれが個々の関心に沿ったテーマでの研究を推進した。本書は、そうしたメンバー各人による個別研究成果とともに、本研究を根底で支えた長目塚古墳出土遺物再整理作業の成果を中心に構成する。

(杉井 健)

第3章 謝辞

本研究を実施するにあたっては、じつに多くの方々、諸機関のお世話になった。

阿蘇神社の阿蘇惟之氏、池浦秀隆氏は、長目塚古墳出土遺物再整理の意義をご理解下さり、その長期借用による調査・研究の実施を快諾された。

阿蘇世界文化遺産推進室の緒方徹氏、阿蘇市教育委員会の宮本利邦氏は、長目塚古墳出土遺物の再整理作

査を2011年度に実施し、2012年度からは6号墳の発掘調査を行っている(図3・4)。現在までに、6号墳は葺石を有す2段築成の円墳で、その規模は直径およそ31mであること、壺形埴輪を有していること、その築造時期は古墳時代前期後葉から中期前葉のあいだに位置付けられることなどが明らかになった(図5～8)。そうした調査成果については、毎年度末に発行している『考古学研究室報告』[安田編2013, 留野編2014]で公表しているので本書への掲載は省略するが、調査は今後にも継続する予定であるから、一連の調査に一区切りがついた段階で、総括報告書の作成を目指したいと考えている。

阿蘇地域所在古墳の情報収集にかんしては、高森町高塚横穴群出土の横矧板鉾留短甲[野田2007:p.116]の概要を知ることができた点が大きかった。これについては、今後、関係各位と相談しながら、資料公開の可能性をさぐりたいと思っている。なお、古墳の現地調査にかんしては、

業および平原古墳群の測量・発掘調査が円潤に進むようさまざまなご助言、ご協力をくださった。

熊本県教育委員会の後藤克博氏、三木ますみ氏は、長目塚古墳出土埴輪の調査・研究およびその阿蘇神社への返却にかんし、さまざまなご配慮をくださった。

長目塚古墳 1949・50年調査の責任者、坂本経堯先生のご子息・ご令嬢の坂本経昌氏、徳永文代氏は、坂本経堯先生の書斎での長目塚古墳関連資料の探索、およびそれにより発見された写真の借用と本書への掲載を許可された。

菊池市教育委員会の高見淳氏は、坂本経堯先生の資料探索に際し、さまざまなご協力をくださった。

長目塚古墳出土遺物の分析に関連し、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也氏にはX線画像の、また九州国立博物館の鳥越俊行氏にはX線CT画像の撮影をしていただいた。また、九州国立博物館の志賀智史氏には赤色顔料の分析をお引き受けいただき、その成果をご寄稿いただいた。

阿蘇地域に所在する古墳の情報収集に際しては、野田拓治氏、島津義昭氏、富田紘一氏にさまざまなご教示、ご指導をたまわった。

別府大学の上野淳也氏、玉川剛司氏には、電子平板の操作について懇切なご指導をいただいた。

平原古墳群の測量・発掘調査の実施にあたっては、古墳の地元である阿蘇市山田地区住民の皆様からさまざまなご支援をたまわった。地権者の佐伯朋史氏は調査目的をご理解下さり、調査の実施を快諾された。古墳下道路ぎわの地権者、日野満司氏は簡易トイレの設置を許可された。山田地区区長の廣石勝之氏、大田黒元吉氏は、調査参加者の宿舎のために公民館の使用を許可され、また合宿生活が円滑に進むようさまざまな便宜をはかられた。

カミノハナ古墳群の測量調査にあたっては、地権者の直江文雄氏は調査の実施を快諾された。また、上天草市教育委員会の松田治氏、高野信子氏、天草ビジターセンターの山川清英氏、上天草市文化財保護委員の山崎勝安氏は、作業の円潤化にかんしてさまざまなご協力をくださった。

こうした多くのご支援・ご協力をたまわったことに対し、深く感謝の念を捧げたい。

(杉井 健)

第1部 引用・参考文献

- 一本尚之・高濱美來編 2009「千崎古墳群第7次調査報告」『考古学研究室報告』第44集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-28
- 神川めぐみ編 2006「広浦古墳測量・実測調査報告」『考古学研究室報告』第41集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 27-42
- 甲元眞之・杉井 健編 2007『上天草いにしへの暮らしと古墳』上天草市史大矢野町編1、上天草市
- 坂本経堯 1962「阿蘇長目塚 附 小嵐山古墳」『熊本県文化財調査報告』第3集、熊本県教育委員会：pp. 1-40
- 島津屋寛 2009「熊本県下の古墳時代箱式石棺」『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、熊本大学文学部：pp. 125-156
- 杉井 健 2007「鉄鏃」「土器類破片・人歯ほか」『菊水町史』江田船山古墳編、和水町：pp. 157-168
- 杉井 健 2010「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長墓系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集、九州前方後円墳研究会：pp. 131-184
- 杉井 健 2012a「石室の構造」『大野窟古墳発掘調査報告書』氷川町教育委員会：pp. 47-73・86-88
- 杉井 健 2012b「マロ塚古墳出現の背景」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館：pp. 541-562
- 杉井 健編 2006「千崎古墳群・桐ノ木尾ばね古墳出土人骨調査報告」『考古学研究室報告』第41集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 81-97
- 杉井 健編 2009『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』2006年度～2008年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、熊本大学文学部
- 杉井 健・上野祥史編 2012『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告第173集、国立歴史民俗博物館

- 杉井 健・檀 佳克編 2003「高熊2号墳測量調査報告」『考古学研究室報告』第38集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-8
- 留野優兵編 2014「平原古墳群調査報告2」『考古学研究室報告』第49集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-28
- 西嶋剛広編 2004「高熊古墳第1次・第2次調査概要」『考古学研究室報告』第39集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-20
- 野田拓治 2007「古墳時代」『白水村史』白水村史編纂委員会：pp. 86-120
- 前田真由子編 2006「千崎古墳群第4次調査報告」『考古学研究室報告』第41集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-26
- 三好栄太郎編 2007「桐ノ木尾ばね古墳実測調査報告」『考古学研究室報告』第42集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 37-54
- 三好栄太郎・仙波靖子編 2007「千崎古墳群第5次調査報告」『考古学研究室報告』第42集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-36
- 南健太郎編 2005「長砂連古墳石障実測調査報告」『考古学研究室報告』第40集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 39-50
- 南健太郎編 2009「桐ノ木尾ばね古墳測量調査報告」『考古学研究室報告』第44集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 29-38
- 森幸一郎編 2005「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」『考古学研究室報告』第40集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-38
- 安田未来編 2013「平原古墳群調査報告1」『考古学研究室報告』第48集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-38
- 山野ケン陽次郎・有馬絢子編 2008「千崎古墳群第6次調査報告」『考古学研究室報告』第43集、熊本大学文学部考古学研究室：pp. 1-36

第1部 挿図出典

図1～7：杉井健撮影

図8：留野編 2014